

[特別陳列 コレクションの歩み展によせて]

楊柳観音の楊柳と水瓶

右手に楊柳の枝を掲げ、左手に水瓶を下げる楊柳観音の像は、中国で盛んに造られました。

早くも南北朝時代の例があり、北周保定元年(561年)の金銅像(北京首都博物館蔵)、同じく建徳元年(572年)の金銅像(個人蔵)などが紹介されています。中でも有名なものは東京芸術大学芸術資料館の陳時代太建元年(569年)の銘を持つ金銅像です。南朝のしかも陳の数少ない遺例としても重要な像で、本体と一鑄の光背と円形台座を備え、更に四脚座を伴っているという完備したものです(図1)。珍しい形の光背に五仏を表わし、台座の前には香炉を共に鑄出し、四脚座の上には顔を外に向けた一対の獅子(後補とされる)が鎮座しています。そして、現状で共吹き香炉を台座前に造り、獅子を配するという点は、前記の保定元年銘像と共通しています。また、頭部の裝飾や正面に下がる天衣や瓔珞、水瓶を腰辺りではほぼ垂直に向ける点、そして何よりも、体側に下げる重々しい天衣が魚鱗状に段々の突起を表わす飛鳥仏式の造形などが、前記建徳元年銘像と通じているのです。これらの要素は、南北朝時代の共通項と言えましょう。

隋・唐時代には盛んに造像されたと言われ、実際に遺品も多くあります。隋ではメトロポリタン美術館・根津美術館・佐野美術館・大阪・東京の個人所蔵のいずれも金銅像、また、西安碑林博物館の石像二体など。隋末唐初の京都・個人蔵の金銅像。唐では当館の瀟洒な像(図2)や、個人蔵の小像、盛唐の上海博物館蔵の十一面を有する像(図3)など、以上いずれも金銅像が挙げられます。この上海博物館の像には当館の像と共通する網状の天衣表現があり、透彫り唐草文様の光背と四脚座を備えた

立派なものです。

また、中国・科学出版社発行の『考古』1990年第1期号には、長安の西明寺址の井戸址から高さ8~10センチの盛唐風の楊柳観音が複数発見されたことを伝え、この観音の信仰形態がほの見えて来ます。

さて、このように多数の実例を残している楊柳観音ですが、経典にはこの像についての記載は見るところ少なく、密教義軌で、千手観音の四十手の内の楊柳手から現じた薬王観自在菩薩と同体とされています。そして、この薬王観自在菩薩について、唐訳の『千光眼観自在(千手観音)菩薩秘密法経』には「身上の衆病を消除する為には、楊柳枝薬法を修すべし。(この菩薩は)右手に楊柳を取り、左手は左乳上に当てる。…」とあり、また「慈悲体の金色身で十一面」とあります。楊柳観音の姿は、この像に当たるとされていますが、十一面の例は先の上海博物館の像に見える他、類例は少なく、左手の位置も胸に当てるのではなく、前述のように水瓶を取るものが多いようです。これは古式の蓮華手菩薩が左手に水瓶を持っているのと同じです。

そして、実際の楊柳観音像は、前記のように既に南北朝時代にあり、この唐訳経典より先に造られたようです。

これらに対して、元時代の楊柳観音は禪宗美術として描かれ、楽なポーズで岩上に坐し、傍らの水瓶には一枝の楊柳が挿してあります。韓国でもこのタイプの観音が描かれ、高麗の秀れた仏画が残されています。

日本では、白鳳~天平時代の小金銅仏中に、左手に水瓶を下げ、掲げた右手に元は何かを持っていた形跡を残すものがあり、これらの内に、楊柳観音と結びつくもの

があるかどうか?また、大安寺の天平~平安初期と言われる楊柳観音と伝称されている像があり、この名称は不適切であると言われてます。しかし、忿怒相であり、両手とも後補で持物を失っていますが、右手は、何かを把んで掲げるポーズを取っている点、また、楊柳観音は前述のように千手観音、十一面観音とも関連し、大安寺に、その両像が蔵されている点が留意されます。

鎌倉~室町時代の水墨画に描かれた禪宗様の楊柳観音は上記の中国絵画の影響です。

楊柳観音はまた、白衣観音・水月観音・魚籃観音などと共に三十三観音の一つとされています。これは『観音経』中の観音の三十三応身(三十三種のあらゆる階層や老若の人に化身すること)による救済の、三十三の数に合わせて後世、各種の観音を集めたもので、日本では江戸時代に成立したと言われています。

日本では現在も「楊枝浄水供」という供養が京都の三十三間堂に伝えられており、一年の初めに当って閻伽水を本尊十一面千手観音に献じ、白紙を巻いた柳の枝で、満

願の浄水を結縁の人々に灌頂し、一年の無病息災を念ずるものです。この淵源は天平時代に伝えられた密教の『請観音経』による楊枝浄水にあり、平安時代末期の楊柳観音信仰の高まりにあつて、実際に楊柳観音がこの供養のために使われたと考えられています。それにしても、わが国の古代の楊柳観音像の遺例は余り見ません。

そして更に、この楊枝浄水の源は、楊枝をもって水を承け、病者に撒けば、病を除き福を増すという古代インドで広く行われた信仰・風習にあると言われ、楊の枝を折って病者の家に挿せば、たちまち病が愈えるとも言われたようです。これによって楊柳観音の楊柳が薬草とされたことや、水瓶の意味が分かります。

前述の通り、中国で経典にこの観音に関する記事が登場する以前の南北朝時代に既に、その像が造られているのは、仏教の中に取り入れられたこのような古代インドの風習が、早くから中国に伝わり、楊柳観音がその効能により人々の信仰を集めていたことが伺えます。そして、それによって後世には庶民信仰にまで広がったのです。

(村田靖子)

図1. 楊柳観音像 陳・太建元年



図2. 楊柳観音像 唐



図3. 楊柳観音像 唐



季刊 美のたより No.122

平成10年2月19日

発行 大和文華館